

94  
119

學者親見夫子曰述師

94-499



學者  
親見  
大正  
八師

方大新報社

寄贈本



善哉善哉

大徳高祖

序

今を距る一千一百三十四年の昔、空前絶後の大偉人大聖者我が國に出現ましましぬ。之れを我が高祖弘法大師となす。大師は單に眞言宗の開祖たるのみならず、また實に日本文明の開拓者也。大師が我が宗教、哲學、文學、美術に一新創見を出し玉ひし偉業と、教育、殖産、工藝其他國家社會に貢獻せられし功勳と、世道人心に與へられたる感化と、攝取悲愍の高徳とは、燦然として我が文明史上に輝けり。

嗚呼大師の高徳、千古に遍く、大師の偉業、萬世を貫く、大師は實に我が國民の大恩人也。

我社は、現代我邦の學者が、この大恩人に對し、如何に感謝を捧げつゝあるか、又如何に其腦裏に印影しつゝあるかを知らんと欲し、質すに「弘法大師に對する感想」如何を以てしたり。我社の問に應じて回答を寄せられし者八十四。事故を以て斷り來りし者三十八。今その到着順に従ひ之を編次し、題して「學者より觀たる弘法大師」と名け、這の冊子を作すに至れり。

這の小冊子によりて、現代諸學者の弘法大師に對する感想如何を知らしむると同時に、益々大師の高徳偉業に感嘆せしめ、大師が我國文明の發達に、如何に重大なる關係を有せらるゝかを、天下に知らしむるを得ば、我社の幸甚之れに過ぎざる也。

茲に謹んで、我社の需を空うせられず回答を寄せられし學者諸彦に對し、大に感謝の意を表する者也。

編者識

一千一百三十四回御降誕の聖日  
遙かに東寺五重の塔を眺めつゝ

寄稿者氏名便覽

(到着順)

(四)

- |    |         |        |    |          |         |
|----|---------|--------|----|----------|---------|
| 一  | 文學博士    | 高楠順治郎君 | 一五 | 「新佛教」記者  | 高嶋米峰君   |
| 二  | 男爵      | 金子堅太郎君 | 一六 | 三輪田女學校長  | 三輪田眞佐子君 |
| 三  | 文學士     | 渡邊又次郎君 | 一七 | 醫學博士     | 高木兼寛君   |
| 四  | 男爵      | 石黒忠憲君  | 一八 | 文學博士     | 三上參次君   |
| 五  | 文學博士    | 村上專精君  | 一九 | 曹洞宗大學教授  | 山田孝道君   |
| 六  | 德島中學校長  | 鈴木券太郎君 | 二〇 | 「海國青年」主筆 | 伊藤銀月君   |
| 七  | 農學士     | 志賀重昂君  | 二一 | 文學博士     | 加藤博之君   |
| 八  | 學習院女子部長 | 下田歌子君  | 二二 | 文學博士     | 松本文三郎君  |
| 九  | 大道社々長   | 川合清丸君  | 二三 | 「京華日報」記者 | 正岡藝陽君   |
| 一〇 | 博文館主幹   | 坪谷水哉君  | 二四 | 基督教牧師    | 宮崎湖處子君  |
| 一一 | 小說家     | 幸田露伴君  | 二五 | 福嶋中學教諭   | 角田柳作君   |
| 一二 | 男爵      | 九鬼隆一君  | 二六 | 慶應義塾教授   | 吳文聰君    |
| 一三 | 文學博士    | 姉崎正治君  | 二七 | 東洋大學講師   | 境野黄洋君   |
| 一四 | 中央商業學校主 | 梅原融君   | 二八 | 同        | 田中治六君   |

- |    |          |        |    |          |        |
|----|----------|--------|----|----------|--------|
| 二九 | 「六合雜誌」主筆 | 佐治實然君  | 四五 | 成女學校學監   | 宮田脩君   |
| 三〇 | 理學士      | 石川成章君  | 四六 | 文學士      | 園田宗惠君  |
| 三一 | 文學士      | 加藤玄智君  | 四七 | 本派本願寺勸學  | 赤松連城君  |
| 三二 | 曹洞宗大學教授  | 忽滑谷快天君 | 四八 | 文學士      | 下田次郎君  |
| 三三 | 文學士      | 笹倉新次君  | 四九 | 文學士      | 萩野仲三郎君 |
| 三四 | 「新公輪」主筆  | 櫻井義肇君  | 五〇 | 農學博士     | 横井時敬君  |
| 三五 | 京華日報記者   | 川村文芽君  | 五一 | 文學士      | 板垣政一君  |
| 三六 | 文學士      | 中山文雄君  | 五二 | 文學博士     | 建部遜吾君  |
| 三七 | 衆議院議員    | 井上角五郎君 | 五三 | 宗教大學長    | 黒田眞洞君  |
| 三八 | 文學士      | 太田秀穂君  | 五四 | 文學士      | 有馬祐政君  |
| 三九 | 「太陽」記者   | 長谷川天溪君 | 五五 | 「萬朝報」記者  | 圓城寺清君  |
| 四〇 | 理學士      | 今川一君   | 五六 | 「佛教新聞」主筆 | 高田道見君  |
| 四一 | 文學士法學士   | 河上肇君   | 五七 | 文學士      | 辰巳小次郎君 |
| 四二 | 竹柏會主幹    | 佐々木信綱君 | 五八 | 文學士      | 朝永三十郎君 |
| 四三 | 「新小説」主筆  | 後藤宙外君  | 五九 | 文學博士     | 南條文雄君  |
| 四四 | 建仁寺派管長   | 竹田默雷君  | 六〇 | 「都新聞」記者  | 林田春潮君  |

(五)

六二	文學士 德谷豐之助君	七三	「大陽」記者 鳥谷部春汀君
六三	新體詩人 兒玉花外君	七四	東洋大學講師 高嶋平三郎君
六四	東洋大學講師 齊藤唯信君	七五	法學士 秋田信太郎君
六五	文學士 常盤大定君	七六	文學士 上岡市太郎君
六六	文學士 桑原隲藏君	七七	文學士 赤堀又次郎君
六七	文學士 菊地俊諦君	七八	文學士 杉山富樫君
六八	早稻田大學講師 紀 淑雄君	七九	早稻田大學講師 島村抱月君
六九	文學博士 井上哲次郎君	八〇	文學博士 黑板勝美君
七〇	文學博士 谷本 富君	八一	文學士 北澤定吉君
七一	早稻田大學講師 増田藤之助君	八二	子爵 渡邊國武君
七二	文學士 高津敏三郎君	八三	西本願寺勸學 嶋地默雷君
	著述家 梅澤和軒君	八四	哲學博士 荻原雲來君

學者より  
觀たる  
**弘法大師**

六大新報社編纂

**弘法大師に對する感想**

東京帝國文科大学 教授 文學博士 **高楠順治郎君**

密教、漢土に没するも、我國尙三密加持の妙用を傳ふるは、偏に大師の德に歸す。梵音我國に入るも、大師の獅子吼に由らずんば、誰れか能く眞言如語の奧義を知らんや。當時社會改善が、如何に大師に由りて行はれしか、その國民教育が、如何に大師に由りて助けられしか、

此を思ひ彼を觀れば、我國民は擧つて、その誕生を慶し、その出世を祝すべきものと信ず。

二

二

貴族院議員 男爵 金子堅太郎君

弘法大師は、日本の佛教界に於て、學識及藝能を具備する第一の人物なり。且つ政治家たる技倆をも備え、古今獨歩の俊傑なり。

三

前第五高等學校 教授 文學士 渡邊又次郎君

物質的文明は小刀細工の人によりても、之に貢獻するを得べけれども精神的文明は偉人の力に俟つもの非常に大なり。余が近頃、教育界又

は宗教界に於ける偉人の出現を切望しつゝあるは之が爲なり。學殖の豊富なる、見聞の該博なる、識見の卓抜なる、救世の念の強盛なる、又エ子ルギーの非凡なること、大師の如きものにして、始めて今日に於て仰望すべき人物たるべし。大師は單に過去の偉人たりし人にあらずして、尙今日の偉人たるべき人なり。

四

貴族院議員豫備陸軍 軍醫總監 男爵 石黒忠恵君

拙者は、弘法大師には年來崇仰の心を持ち居り候。昔年深く佛法を排斥したる頃にも、弘法大師には多大の崇仰を持ち續け候。其所以は佛法に於て蘊奥を極め、よく帝室の師たるのみならず、國利民福を計り

又盛唐の諸制度を我國に入るゝに於て、頗る力を盡され、加之諸種の工藝に於て、我國の社會を闡き詩文書畫に至る迄、能くせざる所なく而して其一身を持する上に於て、淨潔を極め、萬古人の師とする儀表ともいふべき、實に稀世の偉人と謂つべきを以て也。

五

東洋女學校  
長文學博士

村上專精君

弘法大師は、日本佛教家中、唯一の宗教的事業家と信じ申候。

六

徳島中學校長

鈴木券太郎君

私は只今阿波に住居して、大師の遺徳の洪大なることを日夕感觸する

もの一人であります。且頃日讃岐の善通寺に參つて、此處に詣つて祈願吟誦せる篤信者の幾多の群を見て、大師の御力と生命との永遠不朽なるとにいたく動かされました。私は大師の御行蹟に就きて深く知るものではありませんが、日本に於ける佛教弘通者の第一先達たる外に、教育者にして、文學者を兼ねる不世出の一大巨人たることを信じます。私は此の教育者としての大師の眞面目の、此際層一層に發揮せらるゝの必要を思ふものであります。

七

農學士 志賀重昂君

拜復、西洋人が弘法大師を傳する緒端に、左の文字有之候。



弘法大師は（七七四―八三四年）總べての日本の佛教聖僧中の最も名高き者なると同時に、傳道者、畫伯、彫刻師、書家及び旅行家として有名なり。若し其生命が六十年の代りに六百年も續きたらんに、此人は（日本に於ける）總べての偶像を彫刻したり、總べての高山を開きたり、總べての懷疑を混融したり、總べての奇蹟を行ひたり、且つ民間にて大師の事業なりと傳稱せる總べての他の事業を成就したりたるならん。（下略）

乍然、小生は是れ未だ大師が大なる一半を語りたるものに不過と存候凡そ個人の大所は、世人が英雄拜崇念の結果、克く自然にまで打ち勝ちたりと聯想せしむるに至て其極致と存候。即ち四國に狐の無きは、

大師が狐を封じたるに因れり、逗子に石芋あるは大師に芋を惜みて與へざりしに因れり、磐城の松川に鮎の生せざるは大師に一尾だも與へざりしに因れり、備中の一部に桃の實らざるは大師に一顆だに與へざりしに因れりなど申す漸の傳はるに至て、英雄拜崇念の極致と存候、是れ實に大師の洵大なるより起因せりと存候まゝ、此段御返事迄に申上候、匆々拜具。

## 八

學習院女子部長  
實踐女學校々長

下田 歌子 君

高野山巖さくみしあどゝめて

廣きみ法の道をこそ見れ

## 九

大道社々長 川合清丸君

今回野生が弘法大師に對する卑見、御尋ねに相成り候へども、野生は唯大師は、萬藝萬道の聖者と尊崇するの外、別に卑見無之候。何となれば、大師の人格を品評致し候事は、大師以上の人に非ざれば、出來得べからざるが故に候。

近來學者の癖として叨りに古賢を評論し、甚しきに至りては、釋尊孔子の人格など、臆面なく品評して憚らざる人有之候。釋尊孔子の衆生に於けるは、猶野生が三歳五歳の孫に於けるが如きか。野生は三歳の孫に對しては、桃太郎の話をも聞かせ候事も有之、五歳の孫には、相

撲して負けて遣はし候事も有之候。然るを小學生徒あり、之れを見て清丸は、桃の中より子の生るゝを信じたり。清丸は力を角して五歳の童子に負けたり、と云はゞ如何に、豈に捧腹の價だに無きに非ずや。

余故に曰く、清丸を品評することは、大人にして始めて得べし、小學生徒の決して與かる所に非ず。釋尊を品評することは、唯佛與佛にいて始めて得べし、常智常識の決して與かる所に非ずと。其の大師に於けるも、亦復た是くの如くに候。川合清丸敬復。

## 一〇

博文館編輯長 坪谷水哉君

拜啓、弘法大師に對する小生の感想御尋に相成候處、從來未だ深く研

究致し候事も無之候へども、曾て高野山に登りて堂宇規模の壯大なるに驚き、之を多武峰、阿彌陀峰等に比すれば數十倍し、頼朝、尊氏、信長等の墳墓が空しく寒烟荒艸中に埋没するに比しては、固より其倫を絶ち、日光廟の雄大に較べて、尙は一頭地を抜かんとするに想到し世の政治家が一世を傾倒したりし物質的事業なるものは、宗教家の精神界に寄與する功績の前には餘りに小なるを感じ申候。殊に大師が自ら海を超て唐朝の文物を輸入し、また親しく深山大澤を跋涉して利用厚生之道を開き、長へに其の澤を天下萬衆に被らしむるの偉功を追憶し、上下三千年に亘る帝國史上、比類稀なる傑物と確信致居候、勿々

## 一一

小説家 幸田露伴君

大師は、予等の大恩人なり。

## 一二

樞密院顧問官男爵 九鬼隆一君

拙者は弘法大師の恩徳に深く感ずる者である、一體大師の恩徳については、深く感慨をもつてをるが上に、特に拙者は普通に人の感せぬ或は高僧智識方でさへ感せられぬ方面にまで、大師の大功德を感ずる者である。元來大師の恩徳の大なる事は誰も知らぬ者はあるまいが、拙者が特別に普通の外に感ずる事は、抑々深い。一體日本人は許多の美

徳を備へて居るものであつて、日本人の高尙なる事、忠義なる事、清潔なる事、優美なる事、温和なる事、淡泊なる事、柔順なる事、勇敢なる事、義侠なる事、正直なる事、義烈なる事、風雅なる事、純清なる事、眞率なる事などは、實に日本人の天性であつて、天縱の君子國であるかと思はるゝほどである。丁度これに相對して残念なる事には日本人の規模が小さい、普通の日本人は勿論、日本の英雄豪傑でも推しならし規模が小分である。且つ一方に淡泊だが一方に耐忍もなく、規模も雄大ならぬのである。日本の氣候中和で、風景温潤で生活は甚だ質朴で、衣服室家を盛飾する事を希望もせず、慾念甚淡泊で甚深なる懷疑もなく、深刻なる煩悶もなく淡白で眞率で雄渾なる氣魂に乏

しく、淺薄で輕小である、弘法大師は此長所と短所とを宏大無邊なる煌々たる慧眼を以て見透されて、洵に日本人に的藥なる雄大壯嚴なる宏大無邊なる、規律森嚴なる眞言密教を扶殖し、布教されたのであらう。全く大師の御蔭によつて、いくら日本人の器度を宏大にせられたか計られない、後世豊太閤の如き最も拔けものゝ出來たのも、多分は大師の御蔭であらう。全く日本人の性質に違つた、云はゞ日本人の良藥適劑なる斯の如き雄大なる教法を、あれまでに普及されたのは、實に神通自在の大雄力である。實に大師の御蔭で日本人の雄大になつたのは幾千か計り知るべからざるほどであるが、宗教は段々日本人の本性に立戻つて大師の入定後、暫くして密教の難行苦行を忌み、壯嚴を厭ひ

嚴重を怖れ、温和を慕ふの人心を看破したる惠心僧都は、往生要集を著はして浄土宗派を喚起した、夫より又程なく一轉して、最も日本的なる頻りに淡白簡易なる宗教のみ續々起り來つて、空也上人が念佛宗を起し、法然上人が浄土宗を起し、榮西禪師が禪宗を開き、親鸞上人が一向宗を起し、日蓮上人が法華宗を起し、宗教上の思想は重に淡白無味、專念簡易を主として、又々日本人的に變化し來つた事であり、併しながら大師の功德はエライもので、此淡白に違つた的劑なる雄大嚴重なる宗法が、千有餘年の今日にまで法燈聯綿として六百萬有餘の信者があると云ふ事である。實に大師は萬能を一身に集めて該博洽識で、稀世の大徳である、日本の三聖の中で、大師について異論

を云ふたものはない。

大師は獨り宗教上に偉績の高大無邊のみでない、教育上に就て京都の九條に綜藝種智院を開かれて、儒釋道の諸學術を兼修せしめられた綜藝種智院は今日西洋で云ふ、ユニベルシチーで、我今日大學各學部と定めたる者と同様である、實に大師は驚くべき千古の卓見で偉大の宏徳を施された、夫で日本社會の理想上に宏大なる進歩を與へて、非常の變化を現はした、當代大師の御蔭で、文學、宗教、美術、政治悉く舉りて大進歩を見るに至つた。大師の學問は漢土天竺に涉つて該博洽識、實に萬能を一身に備へた大徳である。此大徳大師が建てられたる宏業偉圖の大功德は、後世人心の衰替に連れて漸く將さに衰へんとす

るは、誠に歎はしき次第である。

一三二

東京帝國文科大學  
教授 文學博士

姉崎 正治君

平安朝の初期は、即ち日本が國民として統一を遂げたる初め、而して弘法、傳教の二大師は小治田以來の佛教を總括して、教法と教制とにて、各統一を遂げたる人、二大師の中につきてその文章、事業、意氣の點より云へば、弘法大師は確かに傳教以上なるべきも、その宗義も事業も世間に近づきすぎたる感あり。爲めに後來の日本の信仰界を支配する力の上にては、傳教は弘法の上でありしと信ず。高野は六十餘州の總菩提所となりしも、叡岳の如く教と學との中心となり得ざりしは、二大師の感化の差を示して餘あり。

一四

中央商業學校主幹

梅原 融君

弘法大師は、我國宗祖の最大なるものなるのみならず、日本文化の始祖と稱するも不可なく、日本人は知らずぐ大師の恩化中に生活するものに可有之候。但かゝる偉大の人傑を祖とする今日の佛者が、大に振ふ能はざるは俯仰慚愧の至に存候。

一五

「新佛教」記者

高嶋 米峰君

眞言宗は平安朝に於ける新佛教なり。弘法大師は、この新佛教の開祖

なり。若し、眞言の末徒、能く大師の眞精神を理會し、常に時代の思潮と順應し來りたらむには、道元、日蓮、起るに及ばず、法然、親鸞立つを須るす。而してまた、實に、微力不徳、吾徒の如きものをして自ら明治の新佛教を標榜せしむるの愚を、敢てするを要せざりしならむ。さるにても、氣の毒なるは弘法大師にして、憐むべきは眞言宗なるかな。

一六

三輪田女學校長 三輪田眞佐子君

弘法大師は、わが史上の最大偉人の一人と存候。特に佛教と大和民族の信向と調和せし點は、敬服の至に存候。亦克己主義の戒律の如きは

その人格の非凡なるを欽仰するに足ると存候、かして。

一七

慈惠病院長 醫學博士 高木兼寛君

嗚呼弘法大師  
國家經營大師

一八

東京帝國文科大学 文學博士 三上參次君

拜復 三十六年六月十四日、弘法大師降誕會に於て、小生の演説したる筆記があまりす、多忙の際にて候故、右にて御間に合ひますまば、ソツ願ひたいものです、敬具。

東京 三上參次

高雄の神護寺には弘法大師が、自分で灌頂をせられた處の人の名を書

かれた書附がある。之も兩三年前に國寶に指定せられて居りますが、私の知つて居る物に於ては、弘法大師の眞筆としては最とも尊といつてである、其の外隨分澤山あるけれども是が第一等と思ふ、殊に面白いことは傳教大師は幾分か弘法大師よりは先輩である。先輩であるにも拘はらず、弘法大師から灌頂を受けられて居る事が、この書付でわかる。この點に於ては弘法大師は實に傳教大師よりも一段高い人になつて居らるのである。併し又他の一方から見ますると、傳教大師は弘法大師より先に叡山を開かれ、其の頃の豪い人でありました。豪い人ではあるけれども、弘法大師が自分より長く支那へ渡つて諸般の事に通じ、凡人でないと云ふ事を知つて、自分は先輩で居ながら、弘法

大師の灌頂を受けられた。灌頂せられた弘法大師も悉しいが、灌頂を受けられた傳教大師も、實に見上げたものである。此の書付は弘法大師の眞筆として尊いのみならず、實に弘法大師の偉人であるといふ事を知ると共に、傳教大師の偉人であるといふ事をも知るに足る材料であります。(弘法大師に對する歴史家の感謝の一節)

## 一九

曹洞宗大學教頭 山田 孝道 君

日本各宗の祖師、各特色有之、容易に軒輊すべからざること候へども、才學識を兼備して而も其道德千古に傳はり、老幼男女、馬丁車夫も、大師といへば一人にかぎりたる如くに信仰いたし候事は、弘法大



師の外に無之と存候。

二一〇

「海國青年」主筆

伊藤銀月君

古今無比の大才子！  
小生が弘法大師に對する感想は、唯だこれのみにて候。

二一一

文學博士  
法學博士

加藤弘之君

弘法大師の宗教上、文學上、稀有の偉人たるは言ふ迄もあらず、然ども其密教なるものゝ迷信たるも亦言ふ迄もなきことなり。僕の大師に對する感想は此の如し。

二一二

京都帝國文科大學  
教授 文學博士

松本文三郎君

大なる哉、大師の宗教觀。一切の宗教を打して之を佛教に約し、一切の佛教を打して之を聲字に約し、一切の聲字を打して之を賀阿汗麼の四字に約し、賀阿汗麼の四字を打して更らに之を吽の一字に約す。唯一眞言、之を開けば以て天地に瀰蔓すべく、以て萬有を包括して餘す所なきなり。而して要は唯三密によりて即身成佛を得せしむるにあり大師の法や、卒然として之に望む、低きが如くにして而も之を仰げば彌々高く、凡も親しみ易く、而して聖も尙ほ以て及ぶべからずとなす千古の偉材に非ざれば、何ぞ能く此の如くなるを得ん。密教は必らず

しも神秘にあらず。經に曰ふ。

諸法本不生 自性離言說 清淨無垢染 因業等虛空  
と、是れ豈に醇乎として醇なるの佛説にあらずや。

二四

二三

「京華日報」記者 正岡 藝陽 君

感想無之候。但し字には感服致し居候。

二四

基督教牧師 宮崎湖處子 君

弘法大師に對しては、幼少より宗教界、教育界の偉人として崇敬致し居候外、特別研究致す機會も之なき故、御下問に就き、俄に精確なる判断を申上ること能はざるを甚だ遺憾に存じ候。

二五

福嶋中學教諭 角田 柳作 君

前略、當代は一藝専門の時代也。勢力集注の時代也。大師の八面玲瓏たる所は、この點より見て時代に對する著るしきコントラストとも申すべし。夫れ猩々は猩々を識る。當代が日蓮とか親鸞とか、一方付ける人を悦び、人に親しみて、吾大師の如きを、却つて敬して遠けんとするものあるは、洵に不得止數とも可申歟。要するに今代偏向の眼を以てしては、到底大師の全豹を領會せんこと覺束なしと奉存候。兎に角小生は其一人也。唯小生が聊か窺ひ知りて、歎美措く能はざる一點

二五

は、「十住心論」に著るしく顯れたる大師の組織的同化力に候。同化的精神は吾國粹の粹なるもの、若し世に日本の國家が其忠愛の一念によりて今日あるを得たるものなりといふ者あらば、予は日本の文明は同化的精神の故に、主としてこの精神の故に、過去あり、現在あり、また未來あるを得るものといはんとす。大師はこの點に於て、我民族に固有なる進歩的大精神の儀表也、典型也、不一。

## 二六

慶應義塾大學教授 吳文聰君

弘法大師は、各方面に向つて傑出せし人と思ひ候外、何等の考も無之候。

## 二七

東洋大學教授  
「新佛教」記者

境野黃洋君

弘法大師に就ては、已に兒童走卒に至るまで普く知るところにて、佛教者たるも否とに關せず、等しく其の人格と日本文明に對する貢獻とを、胸中に浮び出さぬものはなかるべく候へば、今更佛教者たる小生等は何とも申上様無之候。無論小生は其の説かれたる教義若しくは其の時代に與へられたる影響等に就て、今日の眼孔より見て一から十迄を仰ぎ奉じて、當今に行はんとする者には無之候へ共、そは其の歴史的時代といふ者と關聯したる問題に候故、強ちに今日を以て大師の當時を律すべからざる者と考へ居り候。先は小生感想の一端迄申上候。

## 二八

東洋大學教授 田中 治六君

大師が學術や教理に於て偉きは勿論に候へども、是は今小生の言はん  
 と欲する所に無之候。大師が我が全國を周遊して到る處に足跡を印し  
 美術、殖産、工業等について指導開拓の勞をとり、躬を以て衆民を教  
 化したることは、其著しき特色と存候。宗教家は實際生活と觸接して  
 社會の經濟的要求をも満足せしむるにあらずば、向後十分の勢力を得  
 んこと難しと考へられ候。「弘法大師とブース大將」これ好箇の研究問  
 題に候はずや。

## 二九

「六合雜誌」主筆 佐治 實然君

傳教大師は勉めて大成せし人、而して弘法大師は天才と被存候。其は  
 教義及文章の上に炳焉と顯はれ、誰れも異論あるまじと被存候。故に  
 予は本邦に於ける佛教歴史上の大家として常に景仰罷在候也。

## 三〇

陸軍教授 理學士 石川 成章君

拜復、小生の弘法大師に對する感想、大略左の如くに御座候。

(一)弘法大師は、宗教家として日本佛教史上の一大偉人たるのみならず、科學的智識卓越し、且つ實地應用上、亦天稟の材能を有し、

經世利民、利用厚生の途を講じ、國民を啓發せられたること、本邦古來幾多高僧中、第一位に推さるるを得ず、例せば、地形地質上に透徹なる高見を有して、深山幽谷を拓き、道路を通じ、橋梁を架し、以て交通に便にし、形勝の地を相して殿堂を創建し、或は地下の水脈を洞察して清泉を湧出せしめ、温泉の成分を驗して是を療病に利用し、石炭石油を採取して、其効用を示すが如き、現實的に世運の進歩を謀り、冥蒙を開導せられたるの實蹟、本邦至る所に存せざるはなし。是れ大師が他の高僧と異なる特色の第一なり。

(二)平安朝の二大高僧、傳教、弘法の兩大師を比較するに、傳教は學

者、教育家にして、弘法は事業家、經世家なり。傳教は専門的にして、弘法は多面的なり。傳教は割據的にして、弘法は普遍的なり。傳教は「蠻カラ」式にして、弘法は「ハイカラ」式なり。

(三)弘法大師は文學、美術、工藝等に於ても、亦卓越せる不世出の天才なり。

## 三二

東京帝國大學  
講師 文學士

加藤 玄智 君

小生近來、西藏佛教を調べるを中、喇嘛教の高僧、巴特瑪薩木巴瓦 Padmasambhava は、先づ弘法大師の様な人だと思へり。

三三一

曹洞宗大學教授 忽滑谷快天君

弘法大師は、我國宗教上、文學上、美術上、重要な位置を占めたる高僧と愚考仕候。

三三三

仙臺第二中學 校長 文學士 笹倉新治君

予の本家は眞言宗なりしを以て、幼時、大師の傳を讀み、深く之れを尊崇したりき。長じて、大師に對する觀念は變化したれども、之れを我が邦文明の一恩人、精神界の一偉人として尊崇し居ることは、今も昔に異ならず、唯その實傳、教義等について知る所の深からざるを憾

とするのみ。貴問に應じて片言を寄す。

三四

「新公論」主筆 櫻井義肇君

若し大師をして明治四十年の今日に在らしめば、如何なる意見、如何なる方法を以て、國家の爲めに、人類の爲めに大法を宣説し玉ひしとする歟。思ひ茲に至りて、末徒の融通の利か無さ加減と、識見の偏局さ加減と、信念の薄弱さ加減とに呆れざる者は、所詮世界的大日本の國民に非ず。

大師の偉大を感じ、端なく浮びたる小生の聯想、此の如し。

三五

「京華日報」記者

川村 文芽君

美術の方面よりして大師を視る、大師は實に千古の彫刻家なり、千古の畫家なり。ドウ考へても大師を人間と思ふ能はず、而して後世大師を以て宗教家の理想的人物なりしとして、美術界より抹殺するものゝ出でんかを憂ふ。

三六

高田師範學校  
教授 文學士

中山 文雄君

弘法大師が新宗教を開かれて、宗教史上に一大光彩を添へしはいはずもがな。諸國を遊歴して利民厚生の事業に心を盡されしは、宗教家と

して能く實際的方面をあらはしたるもの、又綜藝種智院を建て、教育に心を用ゐ、殊に一般士民の入學を許したるは、平民教育の端を開きたる者にして、當時にありては實に萬綠叢中の紅一點と申すべし。その他、文學に、美術に稀有の天才を有し居られしは、何人も首肯する所。蓋し大師の如き、たゞに東洋の偉人たるのみならず、世界史上、有數の偉人たるを失はずと確信罷在候。

三七

衆議院議員

井上角五郎君

拜啓、小生は佛教を敬信するもの、弘法大師は聖僧と相考候事勿論、大師の教理のみにては、大師が當時皇室國民に尊信せらるゝこと彼れ

の如く、以來今日まで社會に崇拜せらるゝこと彼れの如くなる能はず  
 必○ず○教○理○已○外○大○に○勝○る○も○の○あ○り○て○存○す○と○愚○考○仕○候○。實は多少調査候事  
 も有之候得共、此端書にては盡し難く、是れ丈にて回答の責を塞ぎ申  
 候。頓首

三八

高田師範學校  
 校長 文學士

太田 秀穂 君

野生は、密教の開立者、書道の達人、神佛習合説の雄將、名勝地の探  
 險者としての弘法大師をいさゝか聞き及び候外は、未だ格別の研究も  
 致さるは汗顔の至りに候。唯大師といへば弘法大師に限り。名所と  
 いへば大方弘法大師の發見したるが如く傳へられ、「ふるは」歌の如き

も弘法大師の作なるやに世間より唱へらるゝ事を見ても、大師の日本  
 文明史上の地位を推せられ候。今日若し大師の如き大徳に兼ねるに醫  
 藥、美術、文學を巧にする平民大教育家あらば、滿韓人を化導するこ  
 とも難からじと存じ候。野生は平素旅行を好むもの、一度高野山に登  
 り、俗腸を洗ひたしと思へども、未だその機を得ず、唯一念一禮、崇  
 敬の意を表するのみに候。

三九

「太陽」記者 長谷川天溪 君

拜啓、弘法大師に關して何等かの感想を述べよとの仰にては候へども  
 生等の如き門外漢は、何とも申上べき材料を持ち申さず候。若しも日



頃佛教を研究し居る者にて候はゞ、大々的論文を草して、大に得意がる筈にて候へども、無より有の生ずることなきが如く、一文をも草すること出来ざる有様にて洵に赤面の至りにて候。また知つて居るだけの事を申すべしと言ふ事ならば、日本文明史上、極めて重大なる關係を有する人と言ふ位が關の山にて此の以上は申上るだけの力無之候。

されど、門外漢として恒に敬服いたし居り候事有之候。そは第一は弘法大師こそ、日本に於けるアリストートルなるべけれど存することにて候。西洋文明の淵源が、ギリシヤの大哲に在るが如く、東洋文明を集めたる日本文明の大なる泉源は弘法大師なるべしと存じ候。但し此の高僧が果して徳の人なりしや否やに就いては、何とも申上兼候へ

ども、小生は寧ろ智本位の人と見たく存じ候。

第二に敬服いたし居り候點は、大師が在唐の年、極めて短かりしにも拘らず、非凡の修業が出来し點にて候。延暦二十三年に入唐して、大

同元年に歸朝したりと申せば、足掛け僅に三年のみにて候。其の間に諸學の濫奥を極められたりと申すは、殆ど信じ難き程にて候はずや。

今日の留學生の如き、極めて便利なる世に在りながら三四年間泰西に留學しても、唯形のみハイカラとなりて歸朝するのみにて、何等の土産をも齎さるに比して、雲泥の相違ありとこそ申べけれ。思ふに大師は天才能に富みたる上に、日本に在りし間に充分の學問を積み、而して只仕上げにのみ留學いたされしならんと存じ候、勿々。

四〇

大阪高等工業學校教授 理學士

今川 一君

小生の弘法大師に關する意見、御尋ねに預り申候處、別に異りたる愚見も無之、唯傳教、弘法兩大師の如き偉人が、明治の聖代に生れ出でたらんには、今日の如き學生の多くが、精神上に受くる感化効益、頗る多大なるものあらんと思ひ居る次第に御座候。

四一

文學士 河上 肇君

弘法大師の御名は、小生の幼時より聞き覺へ居る處に御座候へ共、お恥しき事には今日に至るまで、未だ其の詳傳を讀み申さず。折角の御

下命に御座候得共、特種の感想の以て特に申上べきものも御座なく、たい崇拜と畏敬とは、凡ての宗教上の大人物に對する共通の小生が感想に御座候而已。

四二

「竹柏會」主幹 佐々木信綱君

世々を經ていよゝたふとし高野山

たかきひかりをたれかあふかぬ

四三

「新小説」主筆 後藤 宙外君

拜復 詳しき事は申上かね候へども、宗教家として、學者として、將

た社会及び文藝に對する大活動家として、日本歴史上、第一等の列に立つべき偉人たることは疑ひなく候。その感化や、勢力の如何に深大なりしかは、歴史を讀まざる人にも、各地到る處に弘法大師の名によりて傳はる口碑傳説の無數なるに徴して知り得べしと存じ候。

### 四四

建仁寺派管長 竹田 默雷君

弘法前に弘法なく、弘法後に弘法なし。

弘法なる哉、弘法なる哉、嗚呼弘法なる哉。

くまもなき法のさもし火さやかにも

高野のおくになほの、りけり

典侍從三位 柳原愛子

### 四五

成女學校學監 宮田 脩君

僅かに「十住心論」、「顯密二教論」其他一二種位、夫も通讀したに過ぎない小生には、未だ精細に大師の學殖を批評する資格もありません然し打見る所、其思索の緻密なる、其論脚の的確なる、優に一代の巨匠として異彩を放つものは、實に大師其人であるうと信じます。世間動もすれば、宗派の異同よりして此大功を默過する者もありませんが、小生は大師を佛教の關係より離しても、なほ獨立思索の人として我國哲學史上に特筆大書すべき偉人たるを失はないと思ひます。否な我國の哲學者はと問はれた時は、殆んど大師を除いて此人と答へる事は出

來ないと思ひます。

### 四六

佛教大學長 文學士 藺田 宗惠君

吾人は、夫の紫衣錦袍、輦輿牛車を宮庭に軋らせ、揚々として濁浪を上ぐるの英風を追想せざるに非ざるも、寧ろ塵寰迥かに隔たる南山の烟霞に韜晦し、三寶鳥の幽聲に禪定の耳を澄ましめし崇高なる大師の晩年を渴仰する者に候。

### 四七

本派本願寺勸學 赤松 連城君

大師の高徳、昭々として日月の如し。世人皆ひとしく之を仰ぐ。然れ

共、今日誰れかよく之を賛し得る者ぞ。古に曰く、英雄能く英雄を知ると、然れば徳、大師にひとしき者に非ずんば、大師の徳を知る能はず、況んや余輩啞羊、何ぞ能く一辭を賛するを得んや。唯余今日に在て、大師の卓見に感ずるの一端を述ん。曰く、綜藝種智院式に所言の眞俗不離の旨是也。是れ宗教と教育の關係てふ問題を解決するに綽々として餘裕あり。宜しく其言を三復し、之を實行せん事を期して可なり。圓通道人連城艸。

### 四八

女子高等師範學校教授 文學士 下田 次郎君

小生は別に感想としては無之、唯、今の僧侶諸氏が弘法大師の如き氣分

になりて、積極的に懸命の働きを爲されんことを希望仕候。

「人は生れ付きよりも勉強に在り」とは、天才ならぬ凡人に、力と希望とを與ふるの語と存候。弘法大師たることは難し、されど其氣分と働きたとは、随分凡人にも企及し得られ候事と存候。

## 四九

女子高等師範學  
校教授 文學士

荻野仲三郎君

謹啓、筆硯愈御多祥奉賀候。扱弘法大師に對する感想を申上る様どの仰に候處、既に御來東の弘法大師は、宗教上は勿論哲學上に於ても、文學上に於ても、はた美術上に於ても、日本文明史上に重要な關係を有するとの御高見にて盡くされ居る様に存せられ候。余が大師に就て

殊に感ずるは、大師の事業が多種多様なると共に、大規模なることに候。大師の開かれたる貴宗が、支那のよりは遙に規模雄大となり、その雄大なる宗旨を遺憾なく、縦横に振廻して、少しも難澁の痕なきは宗教史上の大壯觀にして、寧ろ一大奇蹟と存候。又大師が東寺を以て活動の本據と致され、野山を以て入定の處と定められたるが如き大仕掛なる事も、高僧傳中絶無と存候。余は大師の如き偉人を國史に有することとは、國民の誇として殊に愉快を感ずる所にして、戦争の大勝利に依りて國民的自覺を生せしよりも、大師の如き偉人の追想が、更に大なる自覺を、我が國民に生せしむること、確信仕候。甚だ失禮なる申分には候へ共、教界萎微の今日、大師を想ふの念一層切に候。平生

大師に就て彼是考へ居ることも有之候も、さて書かんとすれば何とやらん、裾野から富士山を見上たる様の心持にて、適當に感想を顯し兼候。極簡短にてもよろしどの御許にまかせ、右の如くに候、敬具。

## 五〇

東京農科大學  
教授農學博士

横井時敬君

拜啓 小生は弘法大師につき、特段の研究をなしたる事これなし。大師が徳望の高く、大師が技倆の秀たるを思ひ、大師が書道にまで達したるを見て、大師が人となりは之を察するに充分なりと信ず。而して之を余が専門たる農業の方面より觀察するに、大師に付ての献貢は幾何なりしか、未だ詳ならざる點多けれども、後世浮屠氏が我農業上に献貢せる所多きを思へば、大師の佛法の扶植に於ける功德の餘澤甚だ大なるものあるを信じて疑はず。大師の人格學問などに對する論評は余が専門と餘り縁遠き故、避けて述べ不申候、不具。

## 五一

丸龜中學校  
校長 文學士

板垣政一君

大權の應迹と稱せられ、千古を照すの明燈と崇めらるゝ大師に對して淺學なる余輩、門外漢の是非を加ふべき限りには無之候へども、小生は大師の生誕地に接近して居住し、大師の開鑿せる池の水にて成熟せる米を食ひ、常に「南無大師遍照金剛」の聲、耳を離れざるが故に、大師に對する尊敬の念、一層深厚なる次第に御座候。新佛教興隆の効

績は言ふに及ばず、國家の實益に與りて如此大功ありし人、宗教界に於ては大師を措て他に之を求むべからずと信じ候、今の宗教家並に教育家たるもの、大に大師に學ぶ所なくんば、徒に讀誦の僧侶、文字の教師たるを免れざるべしと存候。自警旁一言此如に候。

## 五二

東京帝國文科大學  
教授 文學博士

建部 遜吾君

緇衣金紫に接近し、都門風塵の小社會、乃ち是れ法門の天地なりし南都北嶺の時代に、高く舉りて、遠く法幢を南紀の靈峰に掲げたるを我弘法大師と爲す。借問す、大師の法恩に浴する者、何れの處に向うてか、第二十世紀の高野山を求めむとする。

## 五三

宗教大學校長 黒田 眞洞君

大師の高徳、絶世の偉人として之を稱揚し、賢愚の別なく之を嘆歌せぬ者は無し。貴論の如く、宗教上は勿論の事、文學、美術、其他凡ての方面に對し、我國文明史上、一大光彩を放ち、深く人心の上に印象して、今日尙ほ赫々たる者あるは、天下の認識するところに御座候。愚拙などが、呶々する要も無之候。愚拙が最も大師に敬虔の意を表して禮拜する所以のものは、かの前代佛教未發の教義を發揮し、其人格によりて宿弊を掃蕩し給ひし高徳を欽仰するにあらず、況や社會的方面に於ける文學、美術其他功業の燦爛たる光彩に眩惑して、其人を敬

慕するにわらず。唯大師が佛使の天職を完うし給ひし點にあり。牟尼世尊、遺教の世に在りては高僧中、誰れ人か佛使の天職を完うし給はぬ人やある。其中に就いても、修徳に淺あり深あり、行化に遍あり不遍あり、因縁境遇、人々皆亦同じからず。大師の如きは、夙に法統を繼ぎて、善く佛使の天職を完うし給ひし人なり。其教義や、文學や、藝能や、固より問ふ所にわらず、擇ぶところに無之候。愚蒙生死の人も、亦佛使の天職を完うし給ふ芳躅を懷念し、之を忘失せざれば、曠劫生死の中に於て、其人に遭遇するや必然の儀と確信罷在候。此外に愚拙が大師に對する感想としては無之候。

## 五四

高等師範學校、早稲田大學講師 文學士

有馬 祐政 君

小生は、弘法大師に對しては、其の博學宏識にして、而も佛教においては勿論、儒教、道教において、又言語、文學等、諸種の方面において卓拔なる意見を有し、一々に創始的、建設的功業を致され、眞に入面玲瓏の聖僧たる事につき、常に敬慕罷在候。特に日本的佛教の先覺として仰望措かざる所に御座候。但し其の教風の如き、進化を要するもの不少と存候。畢竟現代においては、進化せる眞言宗の興起を望むと共に、進化せる弘法大師の出現を欲すること切に御座候、勿々。



五五

「萬朝報」記者 圓城寺清君

拜復 世道弛廢し、人心萎靡すること今日の如く甚だしきに及んで、大師を追懐するの念、轉た深さを加ふるのみ。教界復た誰れか能く大師の志業を繼承して、狂瀾を既倒に回へさんとするものぞ。

五六

「通俗佛教新聞」主筆 高田道見君

弘法大師は、日本佛教界中の偉人として、常に崇敬致居候。就中、大乘の戒壇を獨設せんとせし最澄和尚に對しては、南都の護命僧正等が極力是に反抗妨遏の法策を講じたるにも拘らず、大師が「十住心論」

を著はして諸宗を批判し、以て立教開宗の意を公にせられたるに對しては、南都の僧一人として、是に反抗する者なかりし當時の狀勢を概観せば、如何に大師の人格の偉なるかは明瞭に候。

五七

東洋大學教授 文學士 辰巳小次郎君

高野の大師に就て滿腔の感想を述べ記さむとせば、萬海を空にして墨するとも、墨汁足らざる可く、其祕法を藉りて有りとも有らゆる草木の葉を化して紙にすとも、紙數足らざる可きに、纔に縱四寸六分横三寸の端書一葉に之を述べ記せよとの注文、誠に閉口の至りと言ふ可し。彼の詩聖歌仙、ホーマー、バージル、ダンテ、ミルトンも、其長篇の詩歌

を縮めて十七字の俳句にせよと云はれては、大に避易し、避易の餘り「色は匂へど」の歌だに四十有餘文字に非ずやと反問するに至らむ。萬事世界的に成り行きぬる今日、注文の至りて小なるは誠に遺憾千萬。さはさりながら、一二の感想を述べむに、先づ第一に大師の書に對して一言すべし。余は大師の書に心酔する（見る上のみにて）者なるが、其眞蹟は未だ一字半字をも藏するを得ざるを遺憾とす。尤も半字千金一字萬金と稱する珍品、余輩の藏するを得ざるは、固より當然の事。若し之を藏すること有らば、そは瞬時に翼生じて何地へか飛び去りぬ可し。余の能く藏するものは、タカダカ寫眞石版位のものなれども、余の用をなして餘り有り。今之によりて感想を述べむに、大師の

書は、書にして且又書なりと言ふ可し。一二の例證を挙げむに、人の字の如きは全く笹の葉、ササ菩薩のササも笹とも附かず、艸とも附かぬ一種異様の光彩あり。斯くの如くなれば、一通の書翰、一篇の表文は堂々たる大書幅にして、小にしては大師其人の意氣を寫し、大にしては其當時に於ける本朝唐土の風尚を圖せるものと言ふ可し。余輩をして千年の古へを偲ばしむる、何物か能く之に優らむや。

次に大師の通俗的感化に就て言はむに、其中心とすべき所は靈場の巡拜なり。四國八十八個所の巡拜は言ふもおろか、關東にも府内八十八個所、相馬八十八個所、某々八十八個所の巡拜行はれて、其盛なること言辭の能く盡す所に非ず。府内八十八個所、即ち東京市及び其附

近郡村に散在せる八十八個所に就て之を細述せむに、巡拜者の數、平日に於ても何百人と言ふを知らず。或は單身にて巡拜するあり、或は妻子を携へて巡拜するあり、或は團體を成して巡拜するあり、團體には婦人のみにて組織せるものあり、兒童のみにて組織せるものあり。昨今、農家の翁媪子女の如くにして其實然らざるものが、群を成して都大路を徘徊するは、皆此輩なり。巡拜は門外者より之を見れば、空巡空拜にして毫も利益なきが如しと云へども、巡拜者其人に之を言はすれば、決して然るに非ず。其の巡拜する目的物は空灰にも非ず、空骸にも非ず、永劫不死の大師様、薯を石に化し水を油に變する大師様（蓋し幾萬の巡拜者中、大師の空海なるを知る者少く、況や大師の身親

しく空衆と署名せしを知るも甚だ稀なるべく、余の如きも其の空衆と署名せし理由を明にせず、故に教を江湖の諸賢に乞ふにして、其の奉願する利益は無量不測、後生の事は勿論、今生の事にも効驗顯著なること疑無し。實に熱誠の巡拜者を見るに、皆宗教心の厚くなりたるは勿論、他人に接して柔和懇切になり、多病の身體も健康を復し、新開の家業も繁昌を致したるなり。斯くの如くなれば、巡拜の盛なるは、固より當然の事なり。従て巡拜の靈場八十八個所は賽錢の大なる集散地に化したりしが、銀貨漸小の今日、青錢一圓は銀貨一圓二三拾錢に値するより、巡拜界は勢自から青錢即ち賽錢の缺乏を告げ、而して賽錢は賽米に化し、賽錢箱は賽米箱に化し、従て八十八個所は米の豊富に

有る所に化したり。それは其の筈、八十八の三字は之を合せて一字にすれば、米の字になり、而して八十八個所は米所になればなり。何れにせよ、寺院富貴の基。嗚呼感化の及ぶ所、斯の如く其れ大にして且又遠なるかな。など、出鱈目を書き列ぬる際、會々八百屋の小僧「走りの空豆めしませ」と呼び來りたれば、

出鱈目に新空豆の味なりと

附けて給はれ南無大師さま

### 五八

東京高等師範學校講師 文學士

朝永三十郎君

拜復 門外漢のことゝて、取りとめたる感想も無之、唯漠然と經世の

才○ど、熱○烈○な○る○信○仰○ど○を○併○せ○有○し○た○る○宗○教○的○偉○人○な○り○し○が○如○く○存○じ○居○る○位○に○御○座○候○。從○う○て○御○希○望○の○如○く、「學○者」としての責任ある御返事は、到底出來申さず、唯御返信の責をふさぎ候だけに候故、右は雜誌上の材料としては、何等の價值も有之間敷、可相成は御掲載下されざることを希望仕候、早々。

### 五九

眞宗大學々監 文學博士

南條 文雄 君

「性靈集」上卷に編次の惠果和尚之碑文の中に、或建ニ大曼荼羅、或修ニ僧伽藍處、濟レ貧以レ財、導レ愚以レ法、以レ不レ積レ財爲レ心、以レ不レ慳レ法爲レ性、故得下若尊若卑虛往實歸、自レ近自レ遠尋レ光集會矣と仰せら

れてあり。此の惠果和尚の心性こそは即ち大師の心性なりしこと、信じて疑はざるなり。況んや大師の入唐求法は虚心平氣に勇往邁進したまひし故に、充實して光輝ある大徳となりて歸朝したまひしことにして、虚往實歸の四字は大師の感想を吐露したまひたる文字なること明白なり。此四字は北魏の曇鸞大師も、其「往生論註」に用ゐられたる語にして、曾て之れを「十子全書」中にも瞥見せしことあり。虚而往實而歸とありたり。明治元年、余始めて笈を負て西京に遊學し、論註の講義を聞き、爾來四十年間、此語意を玩索するに津々として其味窮かない。蓋し大師の心量廣大無礙なること虚空の如し、故に往くとして包容含蓄せざるなし。是を以て宗教にまれ、哲學にまれ、文學にま

れ、美術にまれ、充實して光輝あり、大にして之を化し、遂に日本神僧傳中の巨擘となりたまひしこと、鑽仰する所なり。余や碌々、法の爲めに奔走して今夕、北越長岡に在り。去月貴社より回答を要せられたる期限なるに驚き、大師に對する感想の一端を記する事此の如し。

明治四十年丁未五月二十日 越後長岡市願淨寺に於て 南條文雄 合十

## 六〇

「都新聞」記者 林田 春潮 君

拜復 仰せの如く 弘法大師は日本文明史上に於ける各方面の偉人に候へども、小生は美術上に於て、特に尊崇景仰いたし居るものに有之候、草々。

## 六一

「毎日電報」記者  
文學士

## 德谷豐之助君

弘法大師は、或は伊呂波四十七文字を作りて、多大に日本文學の發達を助長し、或は高野山を始めとし、諸所の山を開拓して、殖産經濟に貢献する所多く、或は實語教を作りて世人に社會教育的感化を興へ、或は能文、能書を以て文學、書道に多大なる影響を及ぼせり。然れども是等は畢竟するに大師の本領にはあらず、大師の本領は、眞言密教兩部を我邦に弘通して、能く苦界に没在せる國民を救濟し、以て彼等をして世間の樂及び涅槃の樂を得せしむるに在りしこと明かなり。即ち大師が究竟目的は、唯衆生濟度に在りて絶へて他念なかりしなり。

果して然りとせば、其伊呂波四十七文字の製作、實語教の著作、殖産經濟上の事業、能文、能書の如きは、單に大師が頭腦の多面多角なる活動の發現と觀るも、何等の深義を有するものに非ず。唯此等は衆生濟度の好個の手段、方便としてのみ始めて能く其深義を了解する事を得べきのみ。而して大師に「聲字義」、「吽字義」、「辯顯密二教論」、「十住心論」、「即身義」、等の著作ありし事も、亦唯單に大師が聲音學佛學に關して其造詣深きことを示すものとのみ見るべからずして、寧ろ實際的宗教家としての本領を發揮せんがための手段、方便に過ぎざる者なりと觀て、始めて能く大師の大師たる所以を了解すべき也。思ふに、古來我佛教界の偉人は、其布教の手段、方便として、大抵

皆力を教育、文學、殖産、興業等に用ゐざる者なしと雖も、弘法大師の如く其方法の通俗的にして且つ極めて實社會の實狀に適切なるものは、蓋し尠少ならん。其大師が在世中にありて、既に皇室、貴族、並びに一般庶民より遍く渴仰崇拜せられ、明治の今日に至るも、人、弘法大師の名を聞きて猶崇敬の念を起す所以のもの、洵に偶然に非ず。乃ち余は實に大師が布教法の甚だ巧妙なるに對して、轉た感歎するを禁ずる能はざると同時に、今の頑迷固陋にして偏に舊慣に泥み、絶へて其布教方法の時勢と共に、變通自在の妙を極むべき所以を知らざる佛教家の反省を請はずんばあらず。

要之、獨り書家、文學者、佛學者、殖産家として大師を觀るは、到

底大師の本領を了解する所以にあらず。極めて巧妙通俗なる手段、方便を用ゐて、眞言密教兩部を我邦に弘通し、以て衆生濟度のために一身を獻げし偉大なる實際的宗教家として始めて、能く大師の大師たる所以を悟了すべきなり。

## 六二

新體詩家 兒玉 花外君

弘法大師は、圓滿なる天才なり。詩歌に、彫刻に、將た書法に、一として宜からざるはなし。試みに、高野山嵐の夜、一本の古杉も叫ぶを  
 聽け！

「吁、師の徳は偉なり」と。

六三

東洋大學教授 齋藤唯信君

拜復 弘法大師が、我宗教上は勿論、文學、美術に於ても、日本文明史上に重大の關係を有せらるゝ事は、今更、言ふ迄もなき事と存候。其特に教義に於ては、從來の心本色末の緣起に對し、六大無礙の緣起を主張し、色心の實相を論せらるが如きは、予の常に感嘆致居次第に御座候、草々不宣。

六四

置宗大學教授 文學士 常盤大定君

予が郷里にては、弘法様といへば、三才の兒童の耳にも靈妙の響を傳

へ、何にても人力の及び難き事件には、必ず大師の御名を連絡するを規則とする風あり。予は當年に於ては、別に何とも思はざりしが、今にして大師の民間に及ぼせる感化の深さに驚き居り候。

六五

東京高等師範學校教授 文學士 桑原隲藏君

拜復 貴社御盛榮の條奉賀候。然者、今回弘法大師に對する卑見御下間に預り候が、小生は去月より清國に遊學致し居り、昨今やうく御葉書を接手せし次第にて、最早時日の餘裕もなく、且は客舎追々の際、迎もこの偉人に對する感想は、輕々に申上げ兼ね候。其邊の事情不惡御諒察被降度候。但小生は、平生より弘法大師が、わが佛教界に於け



る稀有の偉人たることを確信致し居るものにて、殊にその佛教ど、わが國體との融合を圖りし卓見には、最も感服致し居るものに御座候。何れ他日緩々卑見を申上ぐる機會も有之べく、今回はこれにて御免蒙りたく候、頓首。(清國北京鎮江胡同にて)

### 六六

丸龜中學校教諭 文學士

菊地 俊諦 君

拜復 御高問に對し、御指定の期日までには御返答可申上處、先日來病氣の爲、期を失し甚だ面目も無之候。後日改めて卑見申述度と存じ候得共、不取敢極簡單に此頃の感想を申述候。

弘法大師は、日本に一有つて二無きはどの偉人と存じ、一度は大師

の眞面目を明にせんと志したることも有之候へ共、此頃はいつも雲に隔てられざる様に感じ、研究心は殆んど消磨致候。唯願くは大師の精神に復る人々の多からんことを思ふのみに候。

### 六七

帝國博物館美術史編纂委員、早稻田大學講師

紀 星 峯 君

宗教に、哲學に、道德に、文學に、美術に、書道に、あらゆる點に於て、弘法大師は偉大なりき。恰も大日如來の一切處に遍滿して、大光明を作すが如く、又一切の諸法悉く是れ大日如來の妙德にして、如來に攝歸せざる者なきが如く、平安朝初期の文明に於ける諸要素にして、大師の智光に照らされ、調攝せられざる者、殆んどなかりき。大師は

實に我が文明史上の精華なり、明星なり、權威なり、一大紀念なり。されば吾人の大師に觀するは、理想の影にして、追憶しては、讚歎、感謝、崇仰、敬慕、高上の念、禁ずること能はざるを覺ゆ。試に海陸の難を凌ぎて、密教の秘奥を傳へ、弘宣流布に力めたるを憶へ。其の教義の印度支那の密教に比して、いかに進歩的にして、善美を盡し、かを憶へ。或は悉曇を傳へ、夥多の經律論疏章等を請來せしが如き、南都臺嶺の高僧頻りに教權の消長に拘々たる時、東大寺別當を辭し、少僧都を辭し(聽されざりしも)、樹林鬱葱たる高雄高野の奥に幽棲隱遁して、日夕教養を事とし、眞濟、眞雅、實慧等をはじめ多くの名僧を出し、が如き、或は十住心論、卽身義等、一百四十餘部、二百二十

餘卷の多くを著作せしが如きを憶へ。又性靈集を繕きて、其の文才に富み、詩に長じ、文に精しく、文學の興隆に功ありしを憶へ。又東寺の什寶龍猛、龍智二祖の畫像、又は一刀三禮の作と傳ふる東寺の不動明王の像に依つて、工巧明に通じ、彫刻を善くし、殊に丹青に妙を得たるを憶へ。又唐より諸種の曼荼羅、善無畏、大廣智、惠果、一行等の諸師の影像、及び密灌曼供の諸道具を齎持して、或は我が畫界の局面を一新し、或は裝飾的藝術の發達に資したるを憶へ。所謂儀軌を定めて、諸佛諸尊の尊容、印契、器仗等を一定し、佛像佛畫の形相に、内容に、表現に、大なる影響を與へたるを憶へ。風信帖、灌頂記及び龍猛、龍智二祖の影像なる飛白文字を見て、いかに書にも巧妙なりしかを

憶へ。而して讃岐國司より萬農池の工事に請聘せられて、土木の大功をさへ立てたるを憶へ。吾人の大師に對する感想、多様甚深ならざるべからざる所以を知らむ。あゝ嘗て高野山上、中秋の曉、殷々たる鐘聲に打たれて、我が感じたる大師は、これを筆にせんには、餘りに偉大なるものなりき。

六八

東京帝國文科大学  
教授 文學博士

井上哲次郎君

弘大法師は、我邦の文明史上に於ける有數の人傑なり。大師は嘗に佛敎界の龍象たるのみならず、又詩文書畫及彫刻等の衆技を兼ねたる天才なり、余嘗て我邦の文明史上に重大なる關係を有せる人物、八人を

選出せし時、大師をも算入せり。是れ恐らくは何人も異論なき所ならむ、余が今尙は深く大師を尊崇するもの、以なきにあらざるなり。

六九

京都帝國文科大学  
教授 文學博士

谷本 富君

弘法大師は、不世出の才人なり。當時大陸の文化を將來して、後昆に貽すの功、誰か之れを偉とせざらん。夫の「十住心論」の如き、一部の哲學組織として是れを観るも、亦眞價乏しからず。吾此頃、高野に登攀して徐に其の遺徳を景仰するに堪へず、捻香の際、試に一偈を賦す

千載追芳躅 同州自一家 性靈何日盡 枯木長生花

讚州後學 谷本 梨庵 百拜

七〇

早稻田大學教授 増田藤之助君

弘法大師は、出世間の巨人にして、又世間の英雄なるかな。一宗の祖として有爲高德の碩僧たりしは言ふ迄もなく、文學に、美術に、教育に、將た利用厚生、開物成務に其功少なからず。就中、平假名の創作は(世に傳ふる如く、果して實に大師の手に成るとせば)其最も著しきものか。カーライルの曰へる如く「人間の案出せる萬の物の中、文字ほど靈妙なるものはなし」とせば、此の最も通用普ねき國語を製作せる大師が、日本の文明進歩に對する貢獻の大なる如何ばかりぞや。其の精博なる學識に、加るに詩文、彫刻、手跡等に妙を極めたる多能多

才、亦た古今に儔ひ少かるべし。而して大師に關して傳へられたる諸の奇蹟の如きは、適ま其超凡非常の人豪たりしを證するものか。余さき頃、府下西新井の大師堂に詣で、一千年前の古聖を偲び、そゝに其盛徳偉業を追懷するを禁する能はざりしが、今、貴社の企に際して、更らに其感を切にするまゝ、一筆如是。

七一

中央大學教授文學士 高津鋏三郎君

大師といへば、我國にて、その空海たる事を知らざる者なきが如し。またその奇蹟は、天下到る所に散在せるのみならず、數里の山奥なる高野山には、今日尙はその信徒の蝟集せるを見る。以ていかに大師が

我が宗教界の偉人たるかを知るべきなり。而して、空海が宗教的感化の、此の如く廣大普遍にして、我國古今の宗教家中にも、殆ど其比を見ざるが如きは、蓋し、空海は先づ能く我が國民性を詳にして、之に適應すべき宗教を唱道せると、また多藝多能にして、文學に秀で、書畫を能くし、工學、醫學の心得さへありて、布教の方便を、最も巧妙にせるが爲めなるべし。

抑々當時の我が國民は、快濶にして理論に疎く、主として現世の幸福を求めて、過去未來の觀念には乏しく、且つ上下一般我が神祇を尊崇すること、毫も諸佛の信仰に譲らざりき。是に於て、空海は包的容なる密宗を唱へ、兩部神道の説を立て、我が神祇をもその宗教中に

同化し、談理講説を次にして、儀式咒文を主とし、加持祈禱を利器とせる、最初の日本の佛教を大成せり。而して、また之を弘むるに、道昭行基等の先蹤に依りて、利用厚生之道より入り、上下一般の苦厄を除き、幸福を増進するを以て、畢生の務とせり。想ふに、是れその感化力の廣大にして、今日に至るまで、其徳を慕ふ者多き故ならんか。余は、大師を以て、我國の宗教家中、最も廣く其感化を及ぼし、最も多くその歸依者を得たる者といはんとす。

## 七二

「繪畫叢誌」主任

梅澤 和軒君

大師に對する感想をとの御申越、充分卑見開陳致すべき筈の處、博覽

會見物の珍客に押寄せられ、且つは千人畫伯展覽會の鑑賞、護國寺、傳通院等の御開帳拜見などにて寧日なく、不本意ながら短文にて御免を蒙り度候。

大師の人物に就いては、惠果和尚の推輓あり、朱千乘、朱少端、曇靖等の推重あれば、今更喋々するの要を見ず候。されど最澄に比して頗る多角的多面的にして、多才多能なりしは、師の特色。此の點は空前絶後とも可申歟。師一人にて、新島、福澤、芳崖、新海、南條、重野、河合諸氏の學才を兼備せらるゝ如く、而して書道に於いては、今日誰人をか指名して、其の亞流と爲すべき。

然るに大師の傳記は、高演、得仁、眞濟、聖寶等の著作ありとも、或は浩瀚或は頌的にして、眞に大師を批評的に觀察し、其の教理と事業とを並觀せる者少きが如くに見受けられ候。

やゝ當世的なる某氏の著書すら、大師の美術的神道的方面を落し、梵學的、文學的方面を看過致居り候。かくては眞言秘藏の經疏は、隱密にいて、圖畫を假らざれば相傳する能はずとの、寫瓶無遺の付法を説破し得べきが。生は派内の士によりて、簡明なる而も多方面なる、大師の傳記の編次せられむことを祈り申候。而して之れを英佛獨の國語に翻譯して、此の多面的宗教家の英風を仰がしむるも亦一興なるべく候。

「三教指歸」、「文鏡秘府論」、「性靈集」等は瞥見致し候へども、「十

住心論、「秘藏寶鑰」其他教理の方は、通讀中故、それ等に關しては沈黙を守り候べく、唯々日本の文學史家に、今少し大師の研究を勧めたく存じ候。二三子以外、這般の大觀をすら爲したるもの無之、弘法大師は念佛宗を唱へられ候由、いひふらし候國文學士の有之候は、ワージルを希臘の史劇と銘打つて、「心の花」に紹介したる英文學士あると一對の笑府に候べし。貴社の「感想集」に據りて、諸家の卓説を拜聽するを樂みて、擲筆いたし候、草々。

## 七三

「太陽」記者 烏谷部春汀君

拜復 弘法大師に關する所見を述べるようにとの貴命に接し候處。實

は弘法大師に付ては、何等の研究をも致したること無之候得者、別段の弘法觀も無之候得共、小生は、大師を宗教家としてよりも、文學者として崇尙するものに御坐候。延喜時代の文運は、殆んど大師の主導したるものと信じ申候。右御回答まで如斯に御坐候、草々不宣。

## 七四

東洋大學講師 高嶋平三郎君

拜啓 小生は弘法大師を以て、我國の宗教界に於て、學識の最も秀でたる偉人と相考居候。右貴答まで頓首。

天の下てらさぬくまもなかりけり

高野の奥の法のかもし火

正三位勳一等男爵 高崎正風

## 七五

法學士 辯護士 秋田信太郎君

死せる今日の宗教界に、大師を再生せしめて、之に其生氣を與へしめん哉。

眞面目を失へる今日の社會に、大師を再生せしめて、其氣風を一洗せしめん哉。

## 七六

縣立今治中學校  
校長 文學士

上岡市太郎君

古來一事に長じ、一藝に秀づる者、甚だ尠しとせず。然れども多能多藝なること大師の如きは、有史以來、未だ曾て有らざる所なり。宗教

に、文學に、將た美術に、其偉業の千古磨滅せざる者多きは、偉人中の偉人にあらざるよりは、誰かよく斯くの如きを得んや。かの高野山の開基、四國八十八ヶ所の靈場創設の如きは、宗教上の偉業として千載の下、猶德澤を萬民に及ぼし、書、畫、詩文に於ては、弘仁文學の開祖として日本文學史上、一大光彩を放ち、殊に「いろは」歌の創作は、我國文化の上に至大の影響を及せり。然れども尙教育に關する識見の看過すべからざるものあり。何ぞや、平民主義に於ける綜藝種智院の設立、即是なり。これ我國に於ける教育方針の一大進歩にして、普通教育の濫觴と云ふべきか。如斯は當時の思想としては、餘りに卓絶にして、餘りに偉大なるに驚嘆せざるを得ざるなり。



如斯、大師は多能多藝にして、識見の偉大なると同時に、その人に接するや、寛容にして洋々春海の如く、而も自ら處すること森嚴にして秋霜烈日の如し。これ大師の大師たる價值の存する所にして、吾人が精神界の大偉人として、景仰措く能はざる所以は、主として是に存す。

## 七七

文學士 赤堀又次郎君

拜復 小生は弘法大師に就ては、研究致したることも無之候故、何とも御答に苦しみ申候、併し「大師正傳」等にみえたる所によれば、大師は、當時の學術に通達せられし事。著作の多き事。遺物の多く現存

せる事。大師に對する信仰の今日に盛なる事等を知るのみに候。

## 七八

徳山中學校  
校長 文學士

杉山 富槌君

拜復 弘法大師に對する感想を徴せられ候處、十分に之を記述すれば到底大論文を以てするも盡す能はず、従うて、こゝには極めて不得要領に失せる嫌ある數言を述べて擱筆いたし候。

宗教家として最も尊重すべき實踐的方面に於て、非常の精力を傾注せられたることは、殆んど他に比類を見ざることにして、予の深く欽仰する所なり、且つ學者として直接間接に、本邦學問界に貢獻せられたることは、日本學藝史に特筆大書すべきものなりと信ず。

## 七九

早稻田大學講師  
「早稻田文學」主筆

島村抱月君

拜復 小生は未だ大師の生涯を研究したること無之、随つて何も評論がまじきことを申上ぐるの資格無御座候。たゞ平假名完成者としての點のみは往年一寸必要ありて取り調べ候へど、是れとても伴信友が、「假字本末」以上の考證を得たりと申す譯に無之候。小生は拙著「新美辭學」に當時も申述候如く、漢字が篆隸楷より草となりし經過を其のまゝ平假名に連続せしめて、支那日本に亘りたる文字發達の一大連鎖圖と見、象字の意字を経て音字に行かざるを得ざりし原理が歴々實證せられたるものと考へ候。而して空海は此の文字原理展開の頂點に立

ちたるものとしておもしろく候。右御答まで。

## 八〇

文學博士 黑板勝美君

旅行や、公務の爲め、ツイ御返事延引相成り汗顔の至りに候。七八年前「大師の行化」に關し、ものしたる一文ありしも今手元に無之、「書道に於ける弘法大師」中より可然御拔萃被下度候、草々。東京にて黑板勝美

宗教家としての弘法大師は、我が佛教史上の一大偉人たるは、もどよりいふを待たぬことであるが、大師の才幹技能は決して單に宗教方面のみでなかつた。文學の方面から見ても優に平安朝初期に於ける一大文豪で、遣唐使藤原葛野麻呂や、同時に留學した橘逸勢など漢文の素養が深くあるべき人々の爲めにさへ、文章を作つてやつたことがあつ

たのみならず、當時文章博士などが作るべき勅答すら、その手に成つた例は少くないのであつて、その文集たる「遍照發揮性靈集」十卷は如何にその文才の卓越せるかを見るに足り、「文鏡秘府論」六卷は、その詩文に關する研究の如何に該博であつたかを知ることが出来るのである。併し宗教以外に於ける大師一生の功績はこの文學などの方面でなくして、實に書道に於ける大功績である。今日大師の眞蹟と傳へらるゝものは、若し手に入ることの出来る人々が、斷簡零墨たりといへども、その價たゞに千金のみならずとして、十襲百襲、之を珍重するのは、決して英雄崇拜的に大師を尊敬し、又は茶人的趣味からばかりでなく、余は十分その理由があることと思ふのである。

然るに宗教家としての大師は、從來幾多の學者に研究せられたにもかゝはらず、書家としての大師はたゞ我が國に於ける入木道の祖といへば、之を仰ぎ、その筆蹟の妙絶なるを賞するばかりで、その書史に於ける位置及び功績について評論を加へた人は甚だ少いやうに考へる。

(中略) 何れにしても日本に於て書道に關し、書論をはじめて研究したのは實に大師その人であるといつてよろしい、そして大師はその研究の結果、自家獨得の技能を遺憾なく發揮したのである。思ふにこれは宗教上に於ける大師の事業と同様で、その精神は何れの方面に於ても一貫して居たのではないか、即ち從來奈良朝に於ける三論法相等の南都佛教は、殆ど全く支那佛教その儘のものであつたが、大師の日本

で開いた真言宗は決して支那に於ける真言宗の原形の儘でなくて、實に弘法大師の真言宗であつたと同じく書道に於ても支那に於ける當時の書風より變化し、古來の法帖碑文の参考として更に一機軸を出したので、全く弘法大師その人の書風なのであつた、これ即ち余が大師を以て我國書史の一新紀元をなしたといふ所以、日本に於ける入木道の祖と大師の仰がるゝ所以のこゝにあるのを信する理由で、大師以後に及び他の文物と同じく我が國の書風は益々日本的趣味を加ふることになつたのであつた。(「書道に於ける弘法大師」の一節)

法の道ひろめしのみか水くきの

跡の光もかゝやきにけり

掌侍從五位 小池みち子

八一

東洋大學講師  
文學士

北澤 定吉君

拜復 貴命の如く、弘法大師の文明史上に重要な地位を占め候事は、よく知悉いたし居り候儘、せめては「十住心論」「秘藏寶論」「顯密二教論」やうのものの通讀いたし、其哲學の一端を學び度ものと心懸け居り候得共、未だ其機會を得ず候。かゝる者の感想よし申上たればとて折角の御企を汚すのみに候へば、今回は御免を蒙り度、不取敢右事情丈申述候、敬具。

今もなほ高野の山にのこりけり

いりしみのりの燈火のかげ

權典侍正四位 「小倉文子

## 八二

子爵 渡邊 國武 君

私の考へに依りますると、實に弘法大師の如きは、獨り宗教者としてのみならず、種々の方面に於て日本に一あつて二無き絶大の偉人であらうと思ひます、斯の如き偉人が、此の國に降誕せられたと云ふことは、此の國の名譽なり、又此の國の人種の光榮であります、我々日本人たるものは、宜しく其の履歷を明にし其の徳化を宣揚して、世界の人に知らしめるのが、是は日本國人たる者の適當の義務だらうと存じます、確に日本人として一あつて二無き所の左の資格を五つ以上持つて居ると考へます。

一、宗教上に一大新機軸を出し、總ての宗教有ゆる哲學をも總合統一して判教判釋を爲せし事。

二、悉曇學者として第一流たりし事。

三、文章家として第一流たりし事。

四、筆道書家として第一流たりし事。

五、意思の鞏固にして威儀の莊嚴、思想の高尙にして徳化の普遍なる事。

斯の如き偉人が此の國に生れたと云ふことは實に其の國の名譽、其の人種の光榮で其の國民の最も誇らねばならぬ所である、故に我々日本人たるものは其の徳化を讚譽し其の事蹟を明にし若くは著書なども世界の語に翻譯して他の國人にも知らしめねばならぬ、天竺に釋迦が出た、支那に孔子が出た、猶太に耶蘇基督が出た亞刺比亞にマホメツトが出た、ペルシアにジャガスタンが出たと云ふ是等はどうかと云ふ

と此の節の世界の名物である、是は矢張り別して其の國民の中で尊信する所の者が其の事蹟を明にし、其徳化を擧げて世界に紹介したからである、故に我々日本國民としては此の事に是非力めなければならぬ譯である。(「日本唯一の偉人」の一節)

### 八三

西本願寺勸學 嶋地 默雷君

今般 弘法大師に對する感想の徵問を辱ふす。予津梁東西、已に期日を逸すと云へども、聊か一言を陳べて來問に報ひんとす。幸に延期の罪を恕し玉へ。

抑大師の高徳、古今に超絶せしことは、世已に定論あり、何ぞ更に

喋々を要せん。大師は夙に大乘深密の秘奥を傳へて、特に本朝東密の始祖となり、皇國を鞏固にし、國運を發揚せしめし其功績の偉大なる眞に等倫を絶せり、況んや伊呂波の假名を作つて綜藝種智の本を立てられしが如き、童蒙の始めより、不知々々佛教の德音に感化せしむるの手段、其の好方を得し者、見所の高さ、可欽仰也。宜哉大師の尊號師の特有に歸するが如きの感あることや、大師は誠に千古の賢聖と謂ふべき也。(廣嶋より東歸の途上、名古屋停車場に於て、草卒之を書す)

### 八四

ドクトル、オア、  
フィロソヒー、 荻原 雲來君

拜啓 筆研御多祥奉賀候。サテ今回小生に弘法大師に對する感想を記

する様貴命に候へども、小生は大師は非常にエラキ人なることは信じて居候へども、未だ大師に關して深く研究せしことなければ、世に公表するに足べき文章は、とても出来申さず、とにかく斯る偉人を我邦に出したるは、吾人が大に慶賀すべく、又世界に對して大に誇るべきことなれば、左に古印度の吉慶歌三首を録して、大師の嘆德に代ゆ。

(歌の漢字音譯及び義譯ともに一行禪師大日經疏第八、縮刷藏經餘七、七四丁以下に出)

左の第一首の歌は印陀羅金剛調 (Indravajra) の調子にして、十一言四句を以て一首とす。其十一言は(一)(一)(一)(一)(一)(一)(一)(一)(一)(一)(一)の圖様に准ふものとす。此中一は長音、くは短音、くは長短音隨意なることを表す。今此の歌を此圖様に照し看るに、第四句の hita-karam は謬なり此の處には唯だ一の長音を要す、然らざれば調を爲さず、故に hita-karam に代るに vai (實に「ハ」云ふ副詞)の如き字を以てせば、其意を害せしめて完全の歌たるべし。又第三句の終 netro は連聲法に背く、宜しく netrah 又は netras に作るべし。

लक्ष्मीधरः काञ्चनपर्वताभरिञ्जलिकनाथरिञ्जमलप्रहाणः

बुद्धो विबुद्धांबुजपत्रनेत्रो तन्मङ्गलं हितकरं प्रथमं प्रजानां

नेमोपदिष्टः प्रवरस्त्रकोपिः ख्यातरिञ्जलिके नरदेवपूज्यः

धर्मोत्तमः शान्तिकरः प्रजानां लोके द्वितीयं शुभमङ्गलं तत्

सङ्घर्मयुक्तश्रुतिमङ्गलाद्यः संघो नृदेवासुरदक्षणीयः

हीश्रीगुणाद्यः प्रवरो गणानां लोके तृतीयं शुभमङ्गलं तत्

Lakṣmīdharah kāñcana-parvatībhāṣa tri-loka-nāthas tri-mala-prahāṇah.  
Buddho vibuddhāṅbuja-pattra-netro tan mangalaṅ hita-karaṅ prathamam  
prajānāṅ (1).

Tenōpadistah pravāras tv akopyah khyātas tri-loke nara-deva-pūyah  
dharmōttamaṅ śāntikaraṅ prajānāṅ loke dvitīyaṅ śubha-maṅgalaṅ tat  
(2).

Saddharma-yukta-śruti-maṅgal'ādhyah saṅgho nī-devāsura-dakṣaṅīyah  
hrī-śrī-guṅ'ādhyah pravāro gaṅṅānāṅ loke tītīyaṅ śubha-maṅgalaṅ  
tat (3).

吉慶阿利沙偈 (第一)

持吉祥衆德 具相金山光 三世之導師 除滅於三垢  
開敷正覺眼 猶如水生葉 是饒益衆生 最初之善慶

同 (第二)

及彼所宣說 第一無動法 開示於三界 人天應供養  
殊勝法能令 諸衆生永寂 是則爲世間 第二之善慶

同 (第三)

正妙法相應 獲得多聞慶 人天修羅等 應供福田僧  
富吉祥慙愧 功德殊勝衆 是則爲世間 第三之善慶

學者より 觀たる 弘法大師 終



諭號勅(延喜廿一年)

醍醐天皇

勅。琴絃已絕。遺音更清。蘭叢雖萎。餘芳猶播。  
故贈大僧正法印大和尚位空海。消瘦煩惱。拋却驕  
貪。全三十七品之修行。斷九十六種之邪見。既而  
佛日西沒。渡溟海而仰餘輝。法水東流。通陵谷而導  
清浪。受密語者。多滿山林。習真趣者。自成淵叢。  
况太上法皇。既味其道。追憶其人。誠雖浮天之波  
濤。何忘積石之源本。宜加崇飾之典。謚號弘法大師。

明治四十年六月十一日印刷  
明治四十年六月十五日發行

編輯者兼

清

瀧 知 龍

京都市下京區坊門中之町  
猪熊西入第七十三番地

印刷者

平

澤 新 次 郎

京都市下葛野郡大内村字  
坊門第一番地寄留

印刷所

六大新報社印刷部

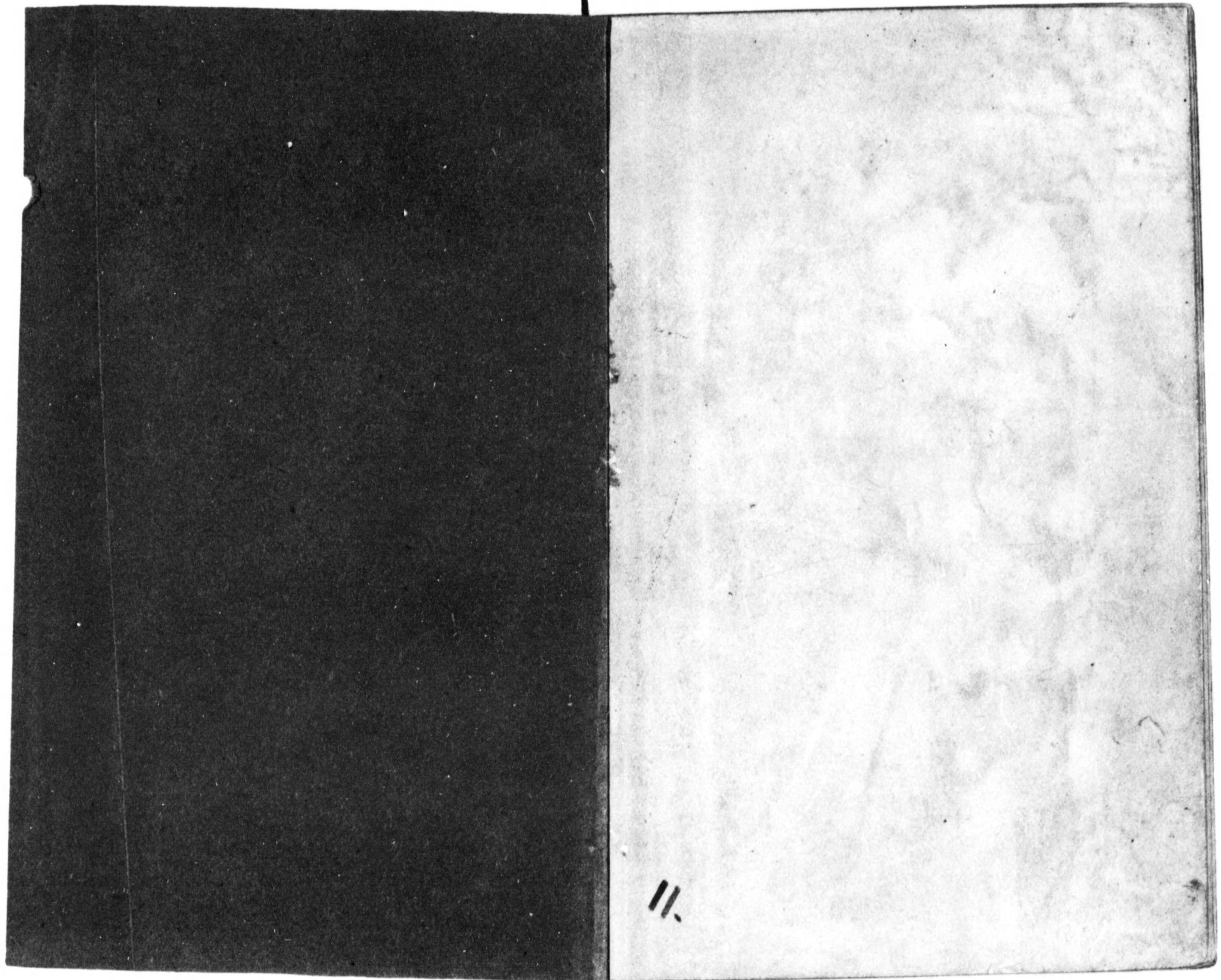
京都市下京區三哲通大宮  
東入第一番地

發行所

六大新報社

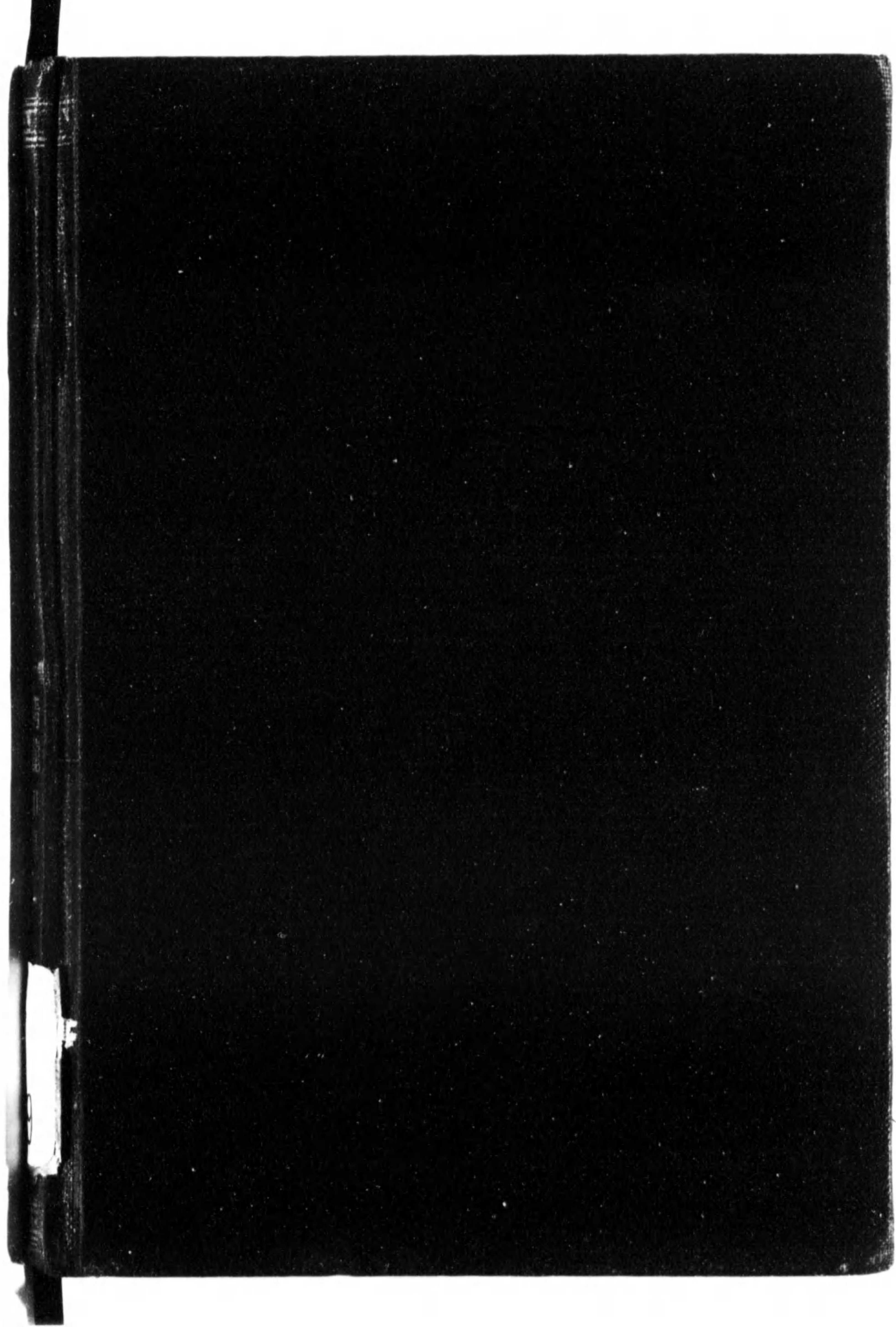
京都市下葛野郡大内村字  
八條第二十八番戶

94  
667



III

94  
499



94  
499

016835-000-7

94-499

学者より観たる弘法大師

清滝 知龍/編

M40.6

ABE-0047



9  
4

